

趣旨説明

比較思想学会第三九回大会（二〇一二年六月二三日、お茶の水女子大学）では、「和辻哲郎と比較思想」という統一テーマの下、基調講演とシンポジウムが開催された。一連の企画のコーディネートとして、趣旨について説明申し上げたい。

二〇一二年一月二八日は本学会設立者である中村元先生の生誕一〇〇年であり、それを記念する大会が二〇一三年六月大正大学で開かれることになっている。本大会において、中村先生が学問上の師の一人として尊敬してやまなかった和辻哲郎を取り上げることは、次年度に予定されている記念大会へのいわば橋渡しの意味をもっているが、和辻を取り上げた理由は、それだけに留まるものではない。次に、「今」、和辻を取り上げる意味について簡単に説明しよう。

今日ますます加速するグローバル化は、文化的価値の多様性、多元性を改めて認識させた。西洋文明であれ何であ

れ、ある特定の文化や思想が、自らの普遍性を素朴に主張することはもはや不可能になっている。また、近代という時代を良くも悪くも形作ってきた国民国家、国民文化の枠組みは部分的にはすでに流動化の様相を呈しはじめている。「国民」という均質な像が崩壊することによって、統一的な価値、文化はとめどなく拡散し細分化されていく。まさに「神々の争い」と言うを得ない状況に、われわれは置かれていたのである。

このような状況下で通約不可能な価値、思想、文化同士を比較することには、いったいどのような意味があるのか。

たとえば、西洋文明の普遍性が説得力をもった時代であれば、日本の、または東洋のある思想を、西洋思想と比べ、それが基準となる当該の西洋思想にどの程度近接しているのか、離れているのかを見定めることには、ある種の意味があったと言える

頼住光子

だろう。しかし、近年の多元的価値の対立状況の中、ある文化とある文化が、ある思想とある思想がそれぞれに閉じており、究極的には相容れないのであるならば、われわれが「比較思想」をすることに、単なる好事家の趣味以上の意味があると言えるのであろうか。

もし、言えるとするならば、そこには、ある非「通約不可能性」（ある種の「普遍性」とも言えるだろうか）が想定されていなくてはならないだろう。まさに、この点こそが、われわれが和辻哲郎の学問と出会う場所なのである。中村先生はその著作「比較思想の先駆者たち」（広池学園出版部、一九八二年）の中で、和辻学の特徴を「普遍的なものをめざす」「努力」の裡に見て取っている。和辻学の根幹は、「倫理学」（普遍）と「倫理思想史」（特殊）との緊張をもった相關関係にあると言えるだろう。われわれにとって素朴な「普遍性」がもはや崩壊した現在においても、われわれが方法としてある種の非「通約不可能性」、つまり、素朴な通約可能性ではなくて、つねに「不可可能性」の乗り越えの中に発現してくる通約可能性を必要とするのであれば、和辻の学的営為は、その問題点をも含めて、今なおわれわれに多くの示唆を与えてくれるのではないか。このような視点から今回のテーマを設定した。

趣旨と関連して当日の諸氏の発表について一言ずつふれておきたい。

田中久文氏の基調講演では、和辻学の間文化性について多様

な側面から検討が行われた。特に興味深かったのは、和辻について、文化や国民を決して閉鎖的固定的なものとは捉えておらず、他と連関するダイナミズムの裡に見ていたという指摘であり、さらに、各国民の文化的自覚によってのみ「民族を超えた普遍的な文化形成」が行われると考えていたという指摘である。このような、自らの独自性を窮めていくところに普遍を顕現させる方法論を、氏は和辻の「空の弁証法」と重ねる。普遍を、さまざまな存在（法）の根底に見出される「空」として理解するというのは、普遍をある固定的な（その意味で抑圧的な）ものと捉えないということで、普遍に対する見方として非常に示唆的であった。

シンポジウムでは、まず田中美子氏が「経験」をキーワードに和辻の初期から最晩年に至る業績を特に仏教への関心に焦点をあてて検討した。氏は、和辻は、日本人の歴史的風土的に限定された特殊性として「自他の情的結合」をあげ、このような特殊としての「経験」に背後から統一を与え、かつ「個」を成り立たせる「ロゴス」を仏教哲学に求めたとした。「経験とロゴスとの間の根本的な矛盾がロゴスに不断の自己展開をもたらす」という氏の言葉は和辻の方法論についての新鮮な指摘であった。

次に廣澤隆之氏は、和辻の仏教の研究方法それ自身を再検討する。氏は、和辻は西洋思想を相対化しつつ倫理的主体を立ち上げるために「無我」や「縁起」の思想を援用していると、和

辻における仏教研究の重要性を指摘した上で、和辻の解釈学的な仏教研究の問題性を突く。西洋近代に成立した仏教を継承する和辻は、宗教的体験、つまり近代の知からは非合理的とされてしまうが仏教にとって決定的な重要性をもつ次元を捨象していると言うのだ。氏は、「空」(普遍性としても解釈され得る)の理解を宗教体験という観点から再吟味する必要性を鋭く指摘するのである。

最後に清水正之氏は、「普遍は特殊なるものをおして」(具体的普遍)として発現する」という和辻の言葉を導きの糸として、特殊と普遍を二項対立的に実体化固定化しない和辻の方法の具体的展開をその生涯の著作の内に辿った。特に、原始仏教や原始キリスト教をはじめとする「原始的なるもの」の研究、つまり「根源」の解明が、「自体性」(具体的普遍の特殊発現)を浮き彫りにし、比較思想的視点を確保したという指摘は清新なものであった。

四氏ともに、はからずも「普遍」「特殊」「空」「経験」をキーワードとして和辻の比較思想の方法論の意義に言及したことが印象的であった。

いやおうなく進行するグローバリゼーションの中で、他者の思想を通して自己の思想を見直し、その都度、立ち現れてくるある種の「普遍性」に基づいて対話の「場」を共有する必要性がさらに高まっている。「比較思想」とは、まさにこのような営為を学的に遂行すべきものであろう。今回の試みが、この営

為を多少なりとも実現できていたならば幸いである。

(よりずみ・みつこ、倫理学・日本倫理思想史、
お茶の水女子大学教授)